講義ノート第11回

3 電磁誘導

復習

静電場では

$$\begin{aligned} \operatorname{div} & \mathbf{E} = \frac{\rho}{\varepsilon_0}, \operatorname{rot} & \mathbf{E} = \mathbf{0} \\ \operatorname{div} & \mathbf{B} = 0, \operatorname{rot} & \mathbf{B} = \mu_0 \mathbf{i} \end{aligned}$$

電荷は保存され

$$\frac{\partial \rho}{\partial t} + \operatorname{div} \mathbf{i} = 0$$

電荷に働く Lorentz 力は

$$\mathbf{F} = q(\mathbf{E} + \mathbf{v} \times \mathbf{B})$$

電場が時間変化するときは $\mathrm{rot}\mathbf{E}=\mathbf{0},\mathrm{rot}\mathbf{B}=\mu_0\mathbf{i}$ の右辺に補正項が要る.

3.1 Faraday の電磁誘導の法則

----- 有向ループ C を貫く磁束 -

有向ループ C を貫く磁束は、C をふちとする曲面 S にわたる面積分であり、

$$\Phi = \int_{S} \mathbf{B} \cdot \mathbf{dS} \tag{1}$$

表裏の定め方は Ampère の法則のときと同様.

注:S の取り方によらない.

$$\int_{S} \mathbf{B} \cdot \mathbf{dS} - \int_{S'} \mathbf{B} \cdot \mathbf{dS} = \int_{S \cup \overline{S}} \mathbf{B} \cdot \mathbf{dS} = \int \mathrm{div} \mathbf{B} dV = 0$$

 Φ の単位は $Wb = JA^{-1}$

$$\Phi = \int \mathbf{B}(x, y, z, t) \cdot \mathbf{dS} = \Phi(t)$$

- C に沿う起電力 -

$$\mathcal{E} = \int_{C} \mathbf{E} \cdot \mathbf{dl}[JC^{-1}] \tag{2}$$

注: 静電場だと Stokes の定理より

$$\mathcal{E} = \int_C \mathbf{E} \cdot \mathbf{dl} = \int_S \text{rot} \mathbf{E} \cdot \mathbf{dS} = 0$$

— Faraday の法則 —

磁束 Φ が時間とともに変化するとそれを妨げる(打ち消す)向きに,C に起電力 $\mathcal E$ が生じる. この起電力を誘導起電力という.(C が導線であれば、電流が生じる.) 誘導起電力の大きさは

$$\mathcal{E} = -\frac{d\Phi}{dt} \tag{3}$$

単位は $Wbs^{-1} = JA^{-1}s^{-1} = JC^{-1}$

起電力の向きに関する法則は Lenz の法則ともいう.

例:C は一定,**B** が時間変化する場合.

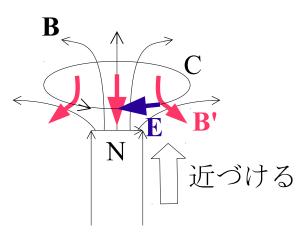


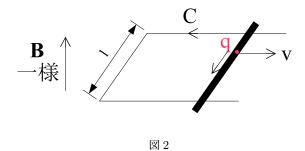
図 1

$$\frac{d\Phi}{dt} > 0, \mathcal{E} < 0$$

C における E は C の向きと逆.B' は B を打ち消す向き.

例:**B** が一定,C が時間変化する場合.

$$\Phi = -Bl(vt + const.)$$
 Lorentz \mathcal{H} $F = qvB$



のとき

$$\mathcal{E} = \int_{C} \mathbf{E} \cdot \mathbf{l} = -vBl = -\frac{d\Phi}{dt}$$

となり,Lorentz 力と整合する.

さて、Faraday の法則 (3) を出発点として、静電場で成り立つ ${
m rot} {f E}=0$ を補正する.

左辺の起電力を有向ループ C に沿う線積分に書き換えると,式(2)より,

$$\int_C \mathbf{E} \cdot \mathbf{dl} = -\frac{d\Phi}{dt}$$

右辺の磁束を磁束密度の, 有向ループ C をふちとする曲面 S にわたる面積分で書き換えると, 式 (1) より,

$$\int_C \mathbf{E} \cdot \mathbf{dl} = -\frac{d}{dt} \int_S \mathbf{B} \cdot \mathbf{dS}$$

Stokes の定理によって、左辺の線積分を面積分に書き換えると、

$$\int_{S} \operatorname{rot} \mathbf{E} \cdot \mathbf{dS} = -\frac{d}{dt} \int_{S} \mathbf{B} \cdot \mathbf{dS}$$

右辺の時間微分を磁束密度にかけると,

$$\int_{S} \text{rot} \mathbf{E} \cdot \mathbf{dS} = -\int_{S} \frac{\partial \mathbf{B}}{\partial t} \cdot \mathbf{dS}$$

曲面 S は任意であるから、

- 電場の回転 -

$$rot \mathbf{E} = -\frac{\partial \mathbf{B}}{\partial t}$$

3.2 自己誘導,相互誘導

$$\Phi = \int_{S} \mathbf{B} \cdot \mathbf{dS} = LI$$

比例定数 L を自己誘導係数 (インダクタンス) といい, 単位は $\operatorname{WbA}^{-1}=\operatorname{H}$ 例: ソレノイド

単位長の巻き数 n, 長さ l, 断面積 S のソレノイドを考える.

$$B = \mu_0 nI$$

$$\Phi = BSln = \mu_0 n^2 lSI$$

よってソレノイドの自己インダクタンスは、

$$L = \mu_0 n^2 l S$$

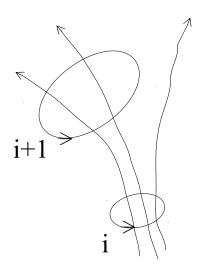


図 3

一般に,i 番目のループを貫く磁束を $\Phi_i(I_1,I_2...I_n)$ (i = 1, 2...n) とすると,

— i 番目のループを貫く磁束 —

$$\Phi_i(I_1, ..., I_n) = \sum_{j=i}^n L_{ij} I_j$$

 L_{ii} : 自己インダクタンス $L_{ij}(i
eq j)$: 相互インダクタンス

例: 単位あたりの巻き数 n_1, n_2 , 断面積 S_1, S_2 のソレノイド

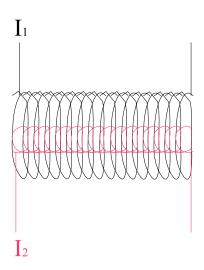


図 4

$$\Phi_1(I_1 = 0, I_2) = L_{11}0 + L_{12}I_2$$

$$\Phi_2(I_1, I_2 = 0) = L_{21}I_1 + L_{22}0$$

また,

$$\Phi_1(I_1 = 0, I_2) = \mu_0 n_2 I_2 \cdot l n_1 S_2$$

$$\Phi_2(I_1, I_2 = 0) = \mu_0 n_1 I_1 \cdot l n_2 S_2$$

よって

$$L_{12} = L_{21} = \mu_0 n_1 n_2 l S_2$$

一般に $L_{ij}=L_{ji}$ が成り立つ.

交流回路

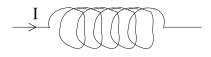


図 5

コイルの起電力の大きさは

$$\left| \frac{d\Phi}{dt} \right| = L \left| \frac{dI}{dt} \right|$$

$$\frac{dI}{dt} > 0$$
 のとき — | — $\frac{dI}{dt} < 0$ のとき — | — $\frac{dI}{dt} < 0$ のとき — | — $\frac{dI}{dt} < 0$ のとき — $\frac{dI}{dt} < 0$

図 6

LCR 回路

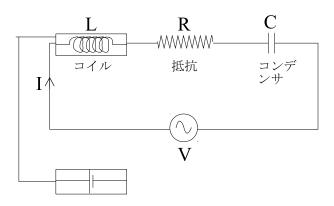


図 7

$$L\frac{dI}{dt} + RI + \frac{1}{C}Q = V$$

両辺を時間微分して, $\frac{dQ}{dt}=I$ と書き換えると,

$$L\frac{d^2I}{dt^2} + R\frac{dI}{dt} + \frac{I}{C} = \frac{dV}{dt}$$

となり、Iについての2階の微分方程式が得られる.

とくに $\frac{dV}{dt}=0$ でも電流は振動する. 抵抗が 0 であるときは LC 回路といい (ただし $\frac{dV}{dt}=const.$), 電流 I は単振動する.